

「音学シンポジウム 2015」開催にあたって

北原 鉄朗¹ 亀岡 弘和^{2,3} 戸田 智基⁴ 饗庭 絵里子⁵ 大石 康智⁶ 小幡 哲史⁵ 梶 克彦⁷
齋藤 大輔² 島内 末廣⁸ 橘 亮輔² 馬場 哲晃⁹ 宮内 良太¹⁰ 森勢 将雅¹¹ 吉井 和佳¹²

概要：本稿では、「音学シンポジウム 2013」「音学シンポジウム 2014」の成功を受けて実施する「音学シンポジウム 2015」について、その実施の趣旨などを述べる。

1. はじめに

「音学シンポジウム」は、音に関するあらゆる学術分野をターゲットに、シングルトラックによる招待講演とポスター形式による一般発表を繰り広げる学術イベントである。2013年5月にこのシンポジウムを初めて実施し、今年で3回目の開催となる。本稿では、「音学シンポジウム」の企画動機や趣旨を簡単に振り返るとともに、今年のコンセプトについて述べる。

2. 「音学シンポジウム」のはじまり

「音学シンポジウム」は、情報処理学会音楽情報科学研究会(SIGMUS)20周年記念企画の1つとして企画され、2013年5月11~12日にお茶の水女子大学で実施された。画像処理分野で最も規模が大きなシンポジウムである「画像の認識・理解シンポジウム(Meeting on Image Recognition & Understanding; MIRU)」に感銘を受けた亀岡が、音の分野でもこのようなシンポジウムを開催すべきであると強く思い、これをSIGMUS20周年記念の最初のイベントに位置付けて実現に至ったものである[1]。実際、これまで音に関する研究を扱うコミュニティは、音楽関係ならSIGMUSや日本音響学会 音楽音響研究会(MA)、音声関係なら情報処理学会 音声言語情報処理研究会(SIGSLP)、電子情報通信学会/日本音響学会 音声研究会(SP)、その他にも、

電子情報通信学会 応用音響研究会/日本音響学会 電気音響研究会(EA)、日本音響学会 聴覚研究会(H、聴覚研)など様々な研究会に分かれて存在し、コミュニティが違えば顔も知らないことも少なくない。日本音響学会は全分野を対象とした研究発表会を春と夏に実施しているが、研究会ごとに分かれた会場での平行進行であり、隣接する分野との交流を促す仕組みにはなっていない。そこで、すべての参加者がすべての分野の発表を聞けるように、シングルトラックによる進行を大前提とした新たなシンポジウムを企画したのである。

この記念すべきシンポジウムをあえてSIGMUSから発信しようということで、音のあらゆる学術分野を対象としていながら、SIGMUSの一研究会との位置付けで実施することとした。「SIGMUS主催でありながら対象を音楽に一切限定しない新しいシンポジウム」ということを広報や口コミなどで丁寧に伝え、ポスター発表や当日参加を募集したところ、54件ものポスター発表が集まり、約350名もの方々が参加し、大盛況となった。もちろん、これには各分野を代表する第一級研究者12名による招待講演が大きな役割を果たしたことは言うまでもない。

第2回となる「音学シンポジウム 2014」は、2014年5月24~25日に日本大学文理学部にて行われた。第2回では、SIGMUS単独開催から音に関する様々なコミュニティを巻き込んだ形での開催へ将来的に移行していくことを睨み、SPとの連催という形式をとり、また、SIGMUSおよびSP以外のコミュニティの研究者にも運営に参加してもらうため、SIGMUSとSPの下部組織として「音学シンポジウム 2014 実行委員会」を組織することとした。亀岡が実行委員長を務め、SIGMUSとSP関係者が数名ずつ、EAと聴覚研から2名ずつ実行委員として入った。シンポジウムの内容としては、各分野を代表するシニアクラスの研究者による招待講演を6件に抑え、最近のホットトピックに詳しい若手研究者6名による招待講演を実施した。前者が各分野

¹ 日本大学
² 東京大学
³ NTTコミュニケーション科学基礎研究所(CS研)
⁴ 奈良先端科学技術大学院大学
⁵ 電気通信大学
⁶ NTTデータ
⁷ 愛知工業大学
⁸ NTTメディアインテリジェンス研究所(MD研)
⁹ 首都大学東京
¹⁰ 北陸先端科学技術大学院大学
¹¹ 山梨大学
¹² 京都大学

表 1 「音学シンポジウム 2015」実行委員会

実行委員長	北原 鉄朗	日本大学
副実行委員長	亀岡 弘和 戸田 智基	東京大学 / NTT CS 研 奈良先端科学技術大学院大学
会場担当	饗庭 絵里子 小幡 哲史	電気通信大学 電気通信大学
プログラム及び招待講演担当	大石 康智 齋藤 大輔 宮内 良太 島内 未廣 橘 亮輔	NTT データ 東京大学 北陸先端科学技術大学院大学 NTT MD 研 東京大学
財務担当	吉井 和佳	京都大学
中継担当	馬場 哲晃	首都大学東京
表彰担当	森勢 将雅	山梨大学
広報担当	梶 克彦	愛知工業大学

を幅広くカバーし、後者が特定のホットトピックを深く掘り下げる「広く、深く」のコンセプトである。ポスター発表も 66 件集まり、約 280 名の方が参加するなど、第 1 回と変わらぬ盛り上がりを見せた。

3. 今年の「音学シンポジウム」

今年、「音学シンポジウム」は 5 月 23~24 日に電気通信大学にて行われる。実行委員長を亀岡から北原に交代し、新たなメンバーで実行委員会を組織し、実施に当たる(表 1)。主催は SIGMUS 単独に戻り、その代わり、SP、EA、聴覚研に「協賛」していただくことになった。協賛研究会には広報に関わっていただくだけでなく、SP と EA については 5 月の研究会を休会にさせていただき、その分積極的に音学シンポジウムで発表してもらうように研究会関係者に声かけをお願いした。SP が連催から協賛に変更になったのは、料金体系の異なる研究会が併存することによる受付の分かりにくさを解消するためである。SIGMUS 非登録員でも気軽に発表してもらえるように発表者は参加費無料の特別措置を取ることとした。その甲斐もあってか、前回と同様の 60 件以上のポスター発表の申し込みがあった。

今年のシンポジウムのテーマは、「より広く、より学際的に」である。招待講演者の選定にあたっては次のことに気をつけることとした。

- 既存の分野のカテゴリー(特に、音楽/音声/電気音響/聴覚といった音響学会のカテゴリー)の中に留まらず、活躍している方を重視する。
- 過去の 2 回のシンポジウムが工学系分野に偏っていたことを考慮し、本シンポジウムで取り上げてこなかった非工学系の分野の招待講演を一定数入れる。

このような考えの下、従来から取り上げてきた分野の他、「音と脳」「生物音響」「聴覚障害」を取り上げることとした。現在予定している招待講演は以下の通りである。

(1) 【聴覚】音のピッチ知覚

大串 健吾(京都市立芸術大学)

- (2) 【電気音響】アクティブノイズコントロールの最近の話題と応用
梶川 嘉延(関西大学)
 - (3) 【聴覚障害】大学病院内で行われる補聴器に関する研究開発 —患者の「聞こえる」を聞くために—
下倉 良太(島根大学)
 - (4) 【音楽/音声】音声と音楽による人間・機械間メタコミュニケーション
伊藤 彰則(東北大学)
 - (5) 【音声/聴覚】表現豊かな音声の認識・合成と Affective Speech-to-Speech Translation への応用
赤木 正人(北陸先端科学技術大学院大学)
 - (6) 【音声/産業応用】IBM のコグニティブ・コンピューティングへの取り組み
吉永 秀志(日本アイ・ピー・エム(株))
 - (7) 【音声/電気音響】音音響符号化技術の最近の話題
守谷 健弘(NTT CS 研)
 - (8) 【音と脳】脳における音と画像のスパース表現
寺島 裕貴(NTT CS 研)
 - (9) 【音と脳】音楽を臨床に活かす: 神経疾患の音楽療法
佐藤 正之(三重大学)
 - (10) 【電気音響】光を使って音を録る: 光学的音響測定とその信号処理
矢田部 浩平、石川 憲治、池田 雄介、及川 靖広(早稲田大学)
 - (11) 【生物音響】音で海の生き物を観る
赤松 友成(独立行政法人水産総合研究センター)
 - (12) 【音楽】音楽を科学的に作る方法
平田 圭二(公立はこだて未来大学)
- (敬称略。題目は本原稿執筆時。変更の可能性あり)

このように今年も素晴らしい方々による招待講演を企画することができた。ぜひお楽しみいただければ幸いです。

4. おわりに

「音学シンポジウム」はまだ 3 回目であるが、今年も 60 件以上のポスター発表を確保することができ、ひとまずは胸を撫で下ろしているところである。今年の「音学シンポジウム」が参加者 1 人 1 人にとって有意義なシンポジウムとなり、このシンポジウムがこの分野に定着して未永く続くことを心から願っている。

参考文献

- [1] 亀岡 弘和 他: 「音学シンポジウム 2014」開催にあたって、情処研報, 2014-MUS-103-1 / 信学技報, IEICE-SP2014-1, May 2014.